



書く

最近、手紙を書いただろうか。仕事と関わりなく、ダイレクトメールでもなく、年賀状などの形式的でもない郵便物をする機会があっただろうか。メールやSNSでのやりとりが多くなりがちだが、たまには趣向を変え、ペンを持つのもきつと楽しい。

手紙のある生活(物語)

『水曜日の手紙』(森沢明夫/著、KADOKAWA、2018年、所蔵:中央・鷺宮・東中野)



実在した企画「水曜日郵便局」をモチーフにした物語。2020年6月時点では残念ながら閉局しているが、読むと手紙を書きたい気持ちになつてくる。水曜日の出来事を手紙に書き送ると、同じように手紙を出した誰かの水曜日の手紙が届く。物語の登場人物たちは、その手紙を通して、悩んだり励まされたりしながら前向きに生きようとしている。ほっこりと心癒される物語だ。

何を書こうかな

文章を書くのは苦手だと思つたら、大胆に筆の一言で、もしくは、絵で表現するのも一案だ。その他にも、消しゴムなどでハンコをつくってみたり、写真を印刷してみたり、旅先のポストカードを送ってみたり……。まずは自分がワクワクするものを探そう。



『気持ち伝わるゆるかわ虹色筆文字』(たみのもみ/著、日東書院本社、2016年、所蔵:南台)

丸みのあるゆるかわい虹色の文字サンプルを参考に、自分のクセを生かした文字を書くことができるようになる。

『季節を楽しむ絵手紙』(朝日新聞出版/編著、朝日新聞出版、2015年、所蔵:江古田)

二十四節季ごとの図案が載っている。絵の具を中心に、ちぎり絵などの手法での描き方も紹介されている。

届く

手紙の中で重要なことは、その中身だけではない。ポストを開けてまず目に入る封筒にも、差出人の心遣いがあるかもしれない。季節感のある遊び心が描かれていたり、特別な思いを封じ込めていたり、街を思い起こす印がついていたりすることがある。ポストをのぞくことも楽しくなるだろう。

切手

『楽しさ届けるはじめての絵封筒』(内尾夕子/著、実業之日本社、2011年、所蔵:中央)



切手は必ずしも封筒の左上に真っ直ぐに貼るもの、というわけではない。表面に必要な金分を貼るなど、最低限のルールとマナーを守れば、ある程度、自由に貼ることができる。そして切手には、さまざまな色柄がある。この特徴を生かして封筒に絵を描こう。季節感や個性あふれる手紙ができあがる。たとえば本書では、扇柄の切手を、浴衣の帯に見立てて貼る絵封筒が紹介されている。ポストを開けてこのような封筒を見たら、思わず笑みがこぼれてしまふ。

切手でお勉強

切手は手紙を届けるために貼るだけでなく、集める楽しみというもある。切手には国の歴史や文化などが反映されることも多い。古今東西に発行された切手から、教養を深めるのはいかがだろうか。

『切手で知ろうシリーズ』
彩流社より出版されている『切手が伝える〇〇〇』というタイトルのシリーズだ。「化学」「仏像」「第二次世界大戦」など、2020年6月時点で、10のテーマで出版されている。シリーズの一部は、中央・本町・野方・南台・鷺宮・上高田にて所蔵している。



『シーリングワックスの本 増補版』(平田美咲/著、誠文堂新光社、2014年、所蔵:上高田)

特別な時には、シーリングワックス(封蝋印)を押してみたいかがだろう。一気に高級感あふれる手紙になる。ちよつとした使い方のコツを覚えれば、簡単にステキな装飾を施すことができる。

消印

『風景スタンプワンダーランド』(吉沢保/著、日本郵趣出版、2012年、所蔵:上高田)

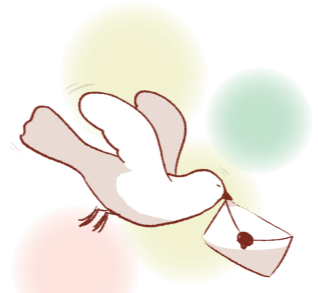


届いた手紙がどこの郵便局から運ばれたか、考えてみたことがあるだろうか。全国で一万以上の郵便局には、「風景スタンプ」「風景印」と呼ばれる、地元の名所や特産品を圖案化した消印が設置されている。ポストに投函しただけでは押されることのないもので知名度は低い、80年以上の歴史がある消印だ。自分で持ち帰るために集めるもよし、旅の思い出に風景印を押して送るのもよし、自由に楽しもう。

『東京しるしのある風景』(松田青子/著、河出書房新社、2017年、所蔵:中央)

作家・翻訳家の著者が、東京23区の風景印を集めた様子をエッセイのように書いた一冊。著者は中野区にも訪れている。区内には、全部で4つの印があり、本書では3つの印が紹介されている。読んでみると都内を散歩した気持ちにもなれる。

郵便の話



道を歩いていると目に入る、郵便ポストや配達員の姿。世界で最も古いサービス業の一つともいえる、人が人のために何かを運ぶというサービス。この使命は同じでも、世界のどこかでは、想像のつかないような郵便局やポストがある。「郵便II赤」だけではない世界の郵便事情をみてみよう。

郵便

『ポストオフィスマニア』(森井ユカ/著、講談社、2006年、所蔵:本町・野方)

水玉模様の郵便集配車をイメージできるだろうか。フィンランドでは、1990年代に大きな改革をした結果、郵便局のブランドのイメージを切り替えることになった。白とブルー、そしてオレンジを使った水玉模様が、郵便のデザインだ。

本書では、このような誰かに話したくなる世界の郵便を見ることが出来る。

ポスト

『世界の郵便ポスト』(酒井正雄/著、講談社エディトリアル、2015年、所蔵:中央)



著者が30年近くにわたって撮影した世界のポストの写真をもとめた一冊。黄色のポストや海中にあるポスト、四角かったり丸かったり、各国によってさまざまな特徴がある。

ポストはいつでも街中にあるのが当たり前。そう思いがちだが、世界に目を向ければ、天災や紛争によりポストが壊滅してしまつたということもある。ポストがある風景は平和の証なのだ。

手紙を書く上で大切なのは、文字などの上手下手ではなく、気持ちがかめられているかどうか。少し気恥しいかもしれないが、□では言えない思いを、気の赴くままにしたためよう。書く・届くときの楽しさはきつとつながる。
手紙を書く手間と届くまでの時間は、決して無駄ではない、大切なものだろう。

※ 本誌の掲載内容・お知らせ情報は記事作成当時のものです。